



夢と睡眠

ダニエル・フロスト

「主なる神はそこで、人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。」(創世記2章21節)

「人がエゴの中にあるとき、本人は、自力で生きていると思う状態ですが、これは古代人が言っているように、睡眠状態に匹敵します。〈みことば〉では、眠りの霊を注がれて、眠りに陥ると言われます。(イザヤ29:10、エレミヤ51:57) 人のエゴは、そのものとして死んでいて、自力で〈いのち〉をもつことは、だれにとっても不可能であることを、わたしは霊界で見せつけられました。エゴを愛し、自力で生きていると豪語していた悪霊が、なまの経験を通して、自力では生きられないと納得し、告白したためです。

わたしは他の人に先がけて、人とそのエゴとの関係を知る機会が与えられ、それもすでに数年間たっています。つまり、わたし自身から考えていることは、何もないことを知っています。

わたしは、明晰判明に感知したわけですが、思考上の概念はその一つ一つが流入によるもので、いつ、どこから、どのようにして、流入があるかを知らされました。したがって、自力で生きていると思っている人は、偽りの中にいます。自力で生きていると信じることによって、あらゆる悪と偽りを自分に同化します。あるがままを信じるなら、決してそのような同化は起こりません。」(天界の秘義150)

スポーツイベントから帰る途中、ひどい事故に出会った中学生がいました。大部回復はしましたが、重傷でした。事故の原因は、運転していたある母親が、居眠り運転をしており、電柱にぶつかってしまったのです。中学生の父親は、忙しすぎる母親による悲劇だと言っていました。あちこちへ急いで回ることが多く、必要な休みを取らずにいたのです。幸いにも、全員一時的な損傷で済みました。

2009年のニューチャーチャイフで、ドン・ローズ牧師が睡眠の必要について書いています。上記の著作を引用し、聖書に書かれている夢が、いかに啓示の瞬間であるかを示しています。たとえば、天界に登っていくヤコブの夢です。(創世記28章11節)。イエスさえ、弟子達に休むように言いました。(マルコ6章31節)

スウェーデンボルイは、夢は天界の天使からの流入であると信じていたと、ローズ牧師は言っています。もちろん夢全てがそうではありませんが、そうであるかどうかはすぐにわかるでしょう。夢の源が違うことはよくあります。しかしスウェーデンボルイは夢の中では主に守られていると言っています。(天界の秘義1983)

睡眠の必要がは時間の無駄と考えられがちですが、最近になって、深い研究がされるようになりました。ローズ牧師は初代の新教会の著者、ジョン・ビッグロウ氏が18世紀、睡眠について記したものを例に取り上げています。ビッグロウ氏は、睡眠があることは、自然に何か摂理的な機能があるに違いないと、論じました。

上の抜粋を見るにつけ、深い眠りが考え、感情、信仰など、自分から出るいのちであることが分かります、

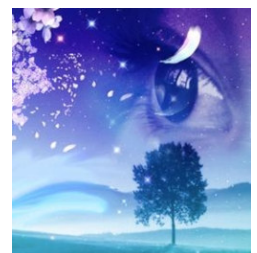
つまり、本当の睡眠は、目覚めたいのちです。ビッグロウ氏は日々の睡眠は、尊く神聖な人生の一部だと言っています。

わたしたちが横になって寝るとき、目覚め時の生活における心配事も休めることができます。ローズ牧師はこれを、世俗に関わる過酷さからの、定期的な解放としてまとめています。眠っているとき、わたしたちは自分の人生の主人公であるという考えから来るプレッシャーやストレスから解放されます。仕事の悩み、経済的な問題、人間関係などは、よく眠ることで見方を変えられます。

また、その向こうに重大な何かがあることに気づきます。事実、夢の中で天界をかいま見ることがあります。人生の30%以上を占めるパワフルで神秘的な時間は、測りがたいものですが必要です。

世俗からの解放とかいま見る天界の二つを一緒にすることで、ジョン・ビッグロウ氏が正しいと信じられます。睡眠は尊く、そして美しいものであることを。朝起きたときの爽快な気分が何よりも証拠です。

日本でも睡眠が、怠慢とか時間の無駄のように考えられがちです。身体が休息を求めて叫んでいても、自分を無理に押し進めます。仕事と忠実、個人的体面を、まっとうな考え



をもった人であれば皆、頭を駆けめぐらせるでしょう。

物事が緊迫し始めたら、目を閉じて横になるといいでしょう。特に何かをしなければならない時、緊張と疲れを感じる時に。代わりに短時間の睡眠をとるのです。貴重であり、神聖な務めです。

祈りにとりなしはない

323号に続く第6回目

神様からの祈り

これこそ、著作で罪は祈りだけでなく、生活の中で避けられる時、実際に克服されると言われている理由です。「どのように悔い改めるべきか？」の質問に対する答えは、「実際に自分を調べ、自分の罪を知り認めて主に祈り、新しい生活を始めることです。」(真のキリスト教530、黙示録講解531:5)人から出る祈りは聞かれません。神から人とともに出た祈りであるべきです。(天界の秘義10299:2)

自己反省や自発的に参加する正餐式の前にする悔い改めのみが各自を強くします。だから「そのあと自分で気づいた罪をひとつずつでも取り除いていくな、現実化していく手始めとして十分です。」(真のキリスト教530)。同じような間違いを犯している自分に気がつきませんが、すでに誓いを立てたので、その罪を慎むことができます。

祈りの柱

祈りとは一生の付き合いです。そして、もちろん、主の祈りは全ての祈りの中で最も重要です。それは天界を通して主からの柱としての役割を果たし、この世に降りて来るにしたがって悪からの解放と共に広がります。(天界の秘義8864)それから主の祈りは「み国と力と栄光」と共に天界に戻り、祈りの源である主に「永遠に」帰ります。アーメン。主の祈りは人間を救うために降りてきて、天界に戻る際に天界へ招くと考えてもいいでしょう。

主より尋ねる。

それでは祈りで何を求めたらいいのでしょうか？本当に純粋な主への祈りは、主が求めるように言われたことのみを求めることです(黙示録講解376)。したがって、その基本は、主が与えられることのみを祈ることです。その訳は、主は私たちが何を必要かをすでにご存じですが、私たちがそれを求めることを望まれます。またそれは私たちに「適切である」からです。それは当然私たちのものとなります。主は言われました「求めよ、そうすれば与えられるであろう。」主が私たちに与えられるものを祈るべきです。さらに主が何を与えられることを望まれているのかを問うてみましょう。それこそ私たちが必要としているものだからです。そのために祈りましょう。それを主は与えられます。素敵なことではありませんか？

—ニューチャーライフ・2009年6月号より

畑 生 命 —著作より—

川原春雄

神をみとめることと、神に反する悪を行わないこと、これは宗教を宗教にする二大原則です。そのうち一つでも欠けると宗教とは言えません。神をみとめつつ悪を行うことは矛盾です。

あるいは善を行いつつも神をみとめない場合もそうです。つまり一方がかけると他方も存在しません。主のみ摂理によって、ほとんどどこでも、何かの宗教があります。そして、そのいずれにも以上の二大原則があてはまります。同じく主のみ摂理によることですが、神をみとめる人はみんな悪は神に反することとしてこれを行いませんが、かれらは天界にその場所を占めています。

天界はその全貌からすると、一人の人間をなしています。そして主がその〈いのち〉または霊魂です。天界にあるその人間には自然の人間がもっているものが全部あります。違うところは、一方が天界的であるのにたいし、他方は自然的であることです。

人には血管とか、内臓と呼ばれる神経繊維をもとにして、組成された〈かたち〉があるだけではありません。皮膚、肢節、腱、軟骨、骨、爪、歯があります。これらのものは組織体それ自身にくらべて、生命の低い段階にあるわけですが、それでも組織体にたいしては、結び目、被膜、架台として役立っています。

天界の巨大人のことですが、それにも以上のようなものが全部備わっています。ですから一つの宗教を信じる人々だけからでなく、いろいろな宗教を信じる人から成り立っています。したがって、前述した教会の二大原則をもって、みずからの〈いのち〉をつくっている人たちは、みんなその天界の巨大人、つまり天界でその場所を得、それなりの程度で幸福を味わっています。これについては前(254節)をいろいろ参照してください。

以上の二大原則はどんな宗教にもあります。それに以上の二つは、十戒が教えていること、またそれは〈みことば〉の中でも一番大切なことであることから明らかです。(神の摂理 326 (9) ~ (11))

自己改革が行われるため、人は悪からひき離されなくてはなりません。これは説明を要しないほどはっきりしています。なぜなら、この世にあつて悪の中にあれば、この世から去った後も悪のうちにあります。この世で悪がとり去られなかったら、あとでも取り除かれません。樹は倒れたところでじっとしています。それと同じように、人の〈いのち〉も死んだときの性格をそのまま維持していきます。同時に、自分の行いに応じて人はみんな裁かれます。その行いを数えあげられると言うのではなく、もとの自分に戻ると同じようにするというだけです。死は〈いのち〉の継続です。ただ違うところは、もうそのとき自己改革はもう不可能になることです。

自己改革はどんな場合でも、最初から最後まで、同時にしかも完全であるはずで、この世での最終・末端的なものは、第一となる最初のものに順応して改革されていきます。それがあとになると不可能になります。そのわけは、人が死後身につけていく最終・末端的〈いのち〉は凍結し、内部にある〈いのち〉と融合するためです。すなわち働きを一つにするわけです。(神の摂理 277 (b))

み摂理によって神が予定されるとすると、天界以外のところは考えられないし、それが変更になることも



あり得ません。したがって、ここでは人類から成る天界をお造りになることこそ、創造の目的であるという点を次の順序で説明します。

第一。人間はみんな永遠に生きるよう造られた。

『神の愛と知恵』の第三章と第五章で、人には、自然的段階・靈的段階・天的段階と呼ばれる〈いのちの三段階〉があり、その三段階は、人間各自に現実に備わっていることが示されています。なお動物には、〈いのち〉の一段階しかありません。それは自然的段階と呼ばれていますが、人間の場合の最終・末端の段階と同じことです。

人間の場合、神の英知に属することを理解し、神の愛に属することを望み願うことができるという点、動物にまさって自分の〈いのち〉を主にに向けて高めることができるわけです。神性そのものを見たり感じとったりできるほど、神のご性格を受け入れます。そしてこれこそ主とむすばれることであり、その結びをおして永遠に生きることにあります。

(2) 全宇宙の創造は、主とどんな関係にあるのでしょうか。それはご自分の神性が知られ得るような〈神ご自身の像または似姿〉をお造りになること以外にはありません。もしそうでないとすると、創造とは言っても、あつてなきが如きものを造ること、実在してもしなくてもいいようなものを実在させることでしかありません。それでは神が舞台上の移り変わりや絶え間ない変遷を、遠くから眺めているようなものです。神が被造物の中にましますのは、その神のご性格を親しく受け入れ、それを見て感じることができる器を造って、それを助け育てていくこと以外にはありません。神には汲み尽くすことができない栄光があります。それをご自分のためにだけしまっておいたりすることがおできでしょうか。

愛には、自分自身を他の人にあずからせたいという望みがあります。むしろできるだけものを自分の中から与えていくことです。神の愛は無限です。与えたあととり戻すようなことはありません。また与えるにしても、滅び失せるようなものをお与えになるでしょうか。滅び失せるものなら、滅びたら無になってしまうし、その中には存在がないわけですから、それ自身にある本質はあつて無きが如きものです。しかし神は存在をお与えになります。それは消えてなくなるようなものではありません。つまり永遠につづくものです。

(3) 人間がみんな永遠に生きられるため、人間にある死すべきものは、とり去られます。死すべきものは物質的肉体のことです。それは死ぬとき取りさられます。そして人間の不死の部分、すなわち精神は裸にされます。するとここに人間の〈かたち〉をもった霊が生まれます。人の精神とはその霊のことです。

人間の精神は死ぬことができません。古代の知者や賢者たちはそれが分かりました。かれらは英知を味わうことができる心すなわち精神がどうして死ぬことができるだろうと言います。現在死について、その内奥の意味を知っている人はわずかしきありません。その意味は、賢者たちが共通に感じりましたが、それも天界からくるものでした。すなわち神は英知そのものであること、人間もそれにあずかっていること、神は不死で永遠に生きる方であることなどです。(神の摂理 324 (1) ~ (3))

天界の秘義第八巻よりの抜粋
創世記 44 章 13-17

5779. 「ヨセフはかれらに言った」とは、そのときのかれらの感知を指します。「言う」とは、感知を意味し、かれらの感じとった感知を指します。言うのは「ヨセフ」ですが、「ヨセフ」は内部のものを表わします。そしてあらゆる感知は、内部のものによってなされます。つまり主のみ力により、内部のものを通して、感知が行われます。それ以外から感知は起こらず、感動もありません。感動は、感知と同様、外部からの流入によって起こるように思われますが、それは錯覚です。

感じるのは、外部のものを通して、内部のものが感じます。人がこの世にあるものを感じる時のように、肉体に備わる感覚器官は、内部人間に仕えるための器官であり道具です。したがって人が感じるには、内部のものが流入として、外部に注がれるわけです。それによって感知が行われ、完成されていくのが目的です。その逆ではありません。

5780. 「あなた方は、何ということをしたのか」とは、自分のものではないものを自分に要求することは、法外な悪であることを意味します。非難されているのは、「盗み」の行為です。盗みとは、主に属する善と真理を自分のものとして要求することです。かれらの「したこと」は、内的意味上、そのような意味をもちます。

米国ジェネラル・チャーチ本部
「プリンアシンポスト」牧師の欄より
2010年1月28日号

今週の金曜日(1月29日)、スヴェーデンボルイの誕生日(1688-1772)を祝います。彼の証言をそのまま受け入れることが、ジェネラルチャーチの基盤です。彼が初めて出版した神学的著書には次のようにあります。「わたしは、神なる主の慈しみによって、ここ何年にもわたり、絶えず、継続して、霊や天使たちとのお付き合いを許されました。かれらの話を聞き、互いに話を交わし、来世での驚くべきことを見たり聞いたりする機会が与えられました。それは人の考えに及ばず、頭にも浮かんでこないような内容です。

霊たちに、さまざまな種類があることや、死後の靈魂の状態について教わりました。地獄は、不忠実な人間の悲しむべき状態です。天界は、忠実な人たちの至福状態です。とりわけ全天界で承認されている信仰の教義を教わりました。」(天界の秘義5)

この最後の言葉は新教会教義の興味深い特徴を示しています。キリスト教界で、新教会は本流からかけ離れており、カルトだと考えている人もいます。しかし、スヴェーデンボルイの表明は、天界全体に維持される伝統的な信仰を描いています。

人が考える以上に新教会は本流であるという考えは、他のキリスト教のどの教派も受け入れずとも、ほとんどの米国人に信じられている新教会の教えから生まれました。いくつか例を挙げてみましょう。

1. 82%の米国人は死後天界に行く信じているが、全てのキリスト教派は、主の再臨による肉体の復活を教えている。
2. 65%の米国のキリスト教信者は、多くの宗教は、永遠の〈いのち〉に導くと信じている。キリスト教でなくてもそうである。
3. 来世では真の愛が存在するという考えと、結婚が永遠に続くという考えは、殆どの米国人に伝えられ、それを描いた映画も多々ある。



4. 全てのキリスト教派で認められている教義ではあるが、信仰のみで救われると信じているキリスト教徒は少ない。ほとんどの人が、良い人生を送ったか、悪の人生を送ったかで救いが決まると思っている。
5. 実際に再来が起ることを期待しているキリスト教徒はアメリカ人の20%にすぎない。
6. 米国人は一般的に天界で天使になると信じているが、どのキリスト教派でもこれを教えていない。

これらの考えは、天界の教義で教えられており、他のいくつかの宗教でも認められていますが、殆どの米国人が信じています。これは新教会は本流ということではないでしょうか？ 19世紀の著者、ホノレ・デ・バルザックは次のように書いています。「スヴェーデンボルグは疑いなく全ての宗教を要約しました。一正確には、人間の宗教をついにまとめました。」

スヴェーデンボルグの誕生日が金曜日の夕方、ハイルマン・ホールで祝われます。-ジェレミー・シモンズ牧師

お知らせ

◎ ガーナよりお手紙です。

アサカラ・ガーナにあるジャンフィー牧師の学校への500ドルの寄付をありがとうございました。10人の子供達の学費を払うことができました。あなたがたのような人々からの支援で、ジャンフィー牧師は教会に心底興味があっても、お金がないために子供を学校に行かせられない親を助けることができます。また、あなたがたの国と、このようにコネクションを作ることが出来るのは、いいことです。ありがとうございました。—ヘレン・ケネディー（ガーナ学校基金）

● ネパールの Loving Arms Mission よりお手紙です。

アルカナ友の会の皆様、622ドルの献金をありがとうございました。



ネパールでは、殆どの子供が冬休みです。ナディーンとラジendraの家族はポカラへ行っています。ポカラは美しい湖で、山に囲まれています。サポートして下さる人々のおかげで、子供達は自分の素晴らしい国を見て学ぶことができます。愛情深い家族、食物、住居、学校に加え、そのような機会

をも子供達に提供できるのは嬉しいことです。楽しい時間を過ごしていることを望みます。

ケント・ショヴァ家の年上の子供達はまだ学校に行っており、旅行には行っていません。しかし過去にはネパールの様々な場所を訪問しました。このような経験は誰にとっても価値のあるものです。

ケニアでは、リオンド学校と教会敷地で今50-60人の孤児達をサポートしています。その中で8人を高校に送っています。これはかなり高価であり、今後も子供達を高校に行かせ続けることができるかどうか分かりません。カーリッドが自分で高校を始めようかと考えていますが、財政的支援がいつも問題です。主が私たちの努力を祝福し、子供達とその世話をする人達を助けることができるよう、願っています。

ヴァレリー・ロジャーズ

定期礼拝案内

東京グループ (第1、第3日曜日)

礼拝: 11:00-12:00

霊的成長プログラム「勇敢に生きる」: 13:00-15:00

3月14日(日) タワーホール 船堀 407号

4月4日(日) タワーホール 船堀 302号
イースター礼拝

場所: **タワーホール**

〒134-0091 東京都江戸川区船堀 4-1-1 TEL:03-5676-2211

<http://www.towerhall.jp/4access/access.html>

・ 東京駅より「JR 総武快速線」馬喰町駅にて乗換。馬喰横山駅から「都営新宿線」で船堀駅下車、徒歩約1分。

・ 新宿駅より「都営新宿線」にて本八幡方面へ約30分。船堀駅下車、徒歩約1分。

連絡先: 参加ご希望の方は、世話人・松本

shiro46m46@gmail.com までご一報ください。

◎東京グループウェブサイト: <http://www.newchurchjapan.org/>

京都グループ

* 交流会・勉強会は月一回行っています。

* 集会所: 大原氏宅 最寄り駅一近鉄伏見駅

* 出席ご希望の方は、京都グループ代表藤本和昭までご連絡下さい。

編集後記

1月の中旬に政府の国際交流事業「青年の船」の参加者で、あるエジプトの青年が我が家に2日ほど滞在しました。彼は信心深いイスラム教で、1日5回祈りをするそうです。心からまじめで敬虔な彼に、イスラム教に反した行動をするとどうなるのかを聞くと、それによって神の罰が下る。自分は絶対にしなうと言っていました。イスラム教がどのようなものかは、本当に信仰している人との関わりからしかわからない所があると思います。彼に会い、新聞やニュースで騒いでいるイスラム教のイメージが全く変わりました。イスラム教はいずれキリスト教と友情を結ぶ日が来ると信じている、と彼は語っていました。(峰子記)

アルカナ出版

〒771-1402 阿波市吉野町西条字西大竹30-2

Tel 088-696-5417 Fax 088-696-5418

郵便振替 01610-1-7463

発行・編集者・翻訳 フロスト・ダニエル・峰子・長島純恵

E-mail: webmaster@arcanapress.com

Web: <http://www.arcanapress.com>

